

オノマトペ語尾の分布と相互の関係

那 須 昭 夫

キーワード：オノマトペ，語尾，仲間分け，促音，共起特性，韻律調整機能

要旨

本稿では、日本語オノマトペに含まれる三種類の語尾の相互関係について考察する。従来、オノマトペ語尾はそれぞれ特有の音象徴機能を発揮しながら対等な鼎立関係をなしていると、暗黙のうちに考えられてきた。本稿ではこの認識に疑義を呈示し、語形評価テストによる統計的事実に基づいて、実際には語尾の分布の広さに顕著な偏りが認められることを明らかにする。また、韻律調整機能・擬音象徴機能・文章語的特性の三つの異なる軸により、三種類の語尾の間に「1項：2項」からなる仲間分けの関係が見出されることを論じる。

1. はじめに

日本語オノマトペの代表的な語尾要素には促音語尾・撥音語尾・リ語尾の三種類がある。これらは二音節の語幹に後接して新たな派生語を作り出す。

(1) 語尾

- a. 促音語尾 コロ＋ッ， バタ＋ッ， ツル＋ッ， ゴト＋ッ， カチ＋ッ
- b. 撥音語尾 コロ＋ン， バタ＋ン， ツル＋ン， ゴト＋ン， カチ＋ン
- c. リ語尾 コロ＋リ， バタ＋リ， ツル＋リ， ゴト＋リ， カチ＋リ

従来、これらの語尾にはそれぞれに特有の音象徴機能が備わっていると考えられてきた。たとえば田守・スコウラップ(1999)は、促音語尾は「瞬時性・スピード感・急な終わり方」を表し、撥音語尾は「共鳴」の表象に関わりがあり、リ語尾は「ゆったりした感じ」や「完了」の概念との結びつきがあるとしている。同様の認識は金田一(1978)による次の説明にも見られる。

(2) 金田一 (1978: 20)

反転を表す「ころ」について言うならば、「ころっ」は転がりかけることを、「ころん」は弾んで転がることを、「ころり」は転がって止まることを表す。

促音には促音の、撥音には撥音の、リ語尾にはリ語尾の表す特有の意味があり、象徴効果の異なる語尾が伴うことで語ごとに微妙なニュアンスの違いがもたらされるとの謂である。このような認識は、従来のオノマトベ論ではごく一般的なものと言つてよい。

しかしながら、オノマトベ語尾の象徴性に関する従来の説明は、その多くが主観的な観察の域を出ないものであり、客観性や一般性の点において満足な説得力を備えたものとは言いがたいものも散見する。(2)の説明を見ると、語尾の現れ方があたかもその象徴機能のみに依存して決まっているように思えるが、実際にはそうした予測を裏切る事例が決して少なくない。次の文に含まれるオノマトベを例に見てみよう。

(3) あの人はいつもポケッとしている。{*ボケリと／*ボケンと}

「ボケ」という語幹は促音語尾とは共起できるが、その他の語尾とは一切共起できない。従来の音象徴論の説明に則るならば、このような振る舞いは専ら語尾の象徴機能に起因すると説明されるだろう。しかし、「ポケッ」に含まれる促音から「瞬時性」や「スピード感」を感じ取るというのは、母語話者の素朴な直観に照らしてもむしろ相当に不自然な解釈である。

本稿では、オノマトベ語尾の特性をめぐって従来なされてきた音象徴論的観点からの説明に疑義を呈示し、語尾の現れ方が必ずしも象徴機能のみによって制御されているわけではないことを明らかにする。とりわけ促音語尾に着目し、その分布に関する統計的事実(語形評価テスト)を踏まえて、促音語尾が意味的に透明な性格を備えた語尾であることを論じる(2節・3節)。

さらに、4節ではオノマトベにおける三種類の語尾の関係について考察する。(2)に見るように、従来、三種類の語尾の間にはある種の相補分布にも似た鼎立的な関係が暗黙のうちに想定されてきた。そして、この鼎立関係を主張する根拠として、語尾の音象徴機能の違いが主張されてきた。本稿ではこの従来の暗黙の認識に対して考察のメスを入れ、三種類の語尾が「1項:2項」からなる「仲間分けの関係」をなしていることを論じる。

2. 促音語尾

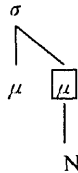
オノマトベの三種類の語尾のうち、まずは促音語尾に注目する。以下に指摘するように、促音語尾にはその他の語尾には見られない特異な性質が備わっている。

第一に、リ語尾や撥音語尾が独自の分節構造を備える形態素であるのに対し、促音語尾だけは韻律レベルでしかその実体が決まらない点で特異である (那須 2007)。リ語尾・撥音語尾にはそれぞれ μ 、 N といった分節が明確に対応するが、促音語尾には分節の実体がなく、その音価は専ら後続音節の頭子音からの同化によって副次的に決まる。音素論では促音に $/Q/$ の記号を与えることがあるが、これはあくまで記述上の便法に過ぎない。次に図示するように、リ語尾・撥音語尾が分節素を備えたモーラであるのに対し、促音だけは唯一、分節素を欠いたモーラである。

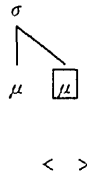
(4) a. リ語尾



b. 撥音語尾



c. 促音語尾



第二に、上述の点と関連して、一般語も含め日本語全般の音韻構造において「リ」のような CV 拍や撥音拍「ン」が語末環境に位置し得るのに対し、促音だけは語末に現れることができない。すなわち語末促音で終わる形態が一切見られないわけだが、そのような中であってオノマトベだけに「コロッ」のような促音終わりの形態が見られるというのは、よく考えてみると不可解なことである。これを「オノマトベの特殊性の現れ」と断ずる前に、次のような疑問を虚心坦懐に抱いてみたい。すなわち、「コロッ」は本当に「コロ」に対して促音を《語尾》として連結させた語形なのかという疑問である。「コロ+ッ」という解釈は、日本語全般において強く忌避される語末促音をあえて作り出す操作をオノマトベに限って認めていることに等しいが、はたしてこれは妥当な解釈と言えるだろうか。換言すると、はたして促音は他のリ語尾や撥音語尾と同等に扱い得る語尾なのだろうか。

第三に、促音は他の語尾に比べ、明らかに語幹との共起の幅が広い (那須 1995, 2007)。オノマトベの語幹の中には、促音語尾のみが排他的に共起するものが多い。(3)の「ボケ」もその一例であるが、他にも次のような例がある。

- (5) ムカ |ムカッ/*ムカン, *ムカリ| と腹が立つ。
スカ |スカッ/*スカン, *スカリ| と晴れ渡る。
モヤ |モヤッ/*モヤン, *モヤリ| と(頭の中が)する。
モサ |モサッ/*モサン, *モサリ| と(髪が)伸びている。
ボヤ |ボヤッ/*ボヤン, *ボヤリ| としている。

むろん語形の容認性は個人間で異なる可能性もあり、たとえば「モサリ」などは個人によっては容認可能と判断されるかもしれない。この点については、那須(2007)および本研究で行ったオノマトペ辞典の語形調査ならびに母語話者を対象とした語形評価テストの結果を通じて、3節においてさらに詳細に検討する。

第四に、促音語尾の「意味的透明性」とも言うべき性格を示唆する次のような現象が指摘できる。オノマトペの中には、「フ(と)」「ツ(と)」のように語尾を一切伴わずに自立できる形態がごく稀ながらあるが、こうした語幹のみの形態(ゼロ形)は、それに促音語尾のついた語形(促音形)と意味を変えずに交替可能な関係にある。一方、撥音語尾のついた語形(撥音形)は同一文脈内で意味を変えずにゼロ形と交替できない(那須2007)。

- (6) a. |フ/フッ/*フン| と立ち止まる。
b. |ツ/ツッ/*ツン| と立ち上がる。

この振る舞いに関連して、那須(2000)は二音節語幹のゼロ形を用いた次のような語形創作テストを試みている。大学生21名の被験者に対し「水を頭からザブとかぶった」のようなゼロ形を含む短文を示し、その文をできるだけ自然に近い形で読むよう指示し、その出力語形を録音採取するというものである。その結果、「ザブッ」のような促音語尾を伴う出力が全体の87.6%を占める高率を示したのに対し、その他の語尾が選ばれる確率は0.9%に過ぎないとの報告がなされている。

以上の四点はいずれも促音語尾の特異性を示唆するものである。かつ、オノマトペの三種類の語尾がその象徴機能に従って鼎立的な関係にあるとする従来の見解に対し、疑問を投げかける事実でもある。すなわち、三種類の語尾は{|語尾:撥音語尾:促音語尾|}という対等な鼎立関係をなしているのではなく、{|促音語尾|対{|語尾, 撥音語尾|}といった非対称な関係にあると考えられる。とりわけ注意を要するのは、促音語尾の共起特性に関わる先の第三点目の指摘である。そこで次節

では、オノマトペ語尾の分布に関する言語事実を探り、促音語尾にどのような特性が見られるか検討する。

3. 促音語尾の分布と共起特性

3.1 先行研究

促音語尾がその他の語尾に比べ明らかに幅広い分布を見せることについては、那須 (2007) にまとまった議論がある。那須 (2007) は、オノマトペ辞典 (Kakehi, Tamori, and Schourup 1996; 以下「KTS」) に掲出されている語尾つきの形態を対象に、それぞれの語尾がどの程度現れるか調べている。それによると、促音語尾・撥音語尾・リ語尾の三者のうち最も多くの語幹と共起するのは促音語尾であることが報告されている。各語尾の出現頻度をまとめた統計を那須 (2007) より引いて示す。

(7)

促音語尾	207/ 230 (90.0%)
撥音語尾	98/ 230 (42.6%)
リ語尾	132/ 230 (57.4%)

KTS には語尾要素の結合対象である二音節語幹が 230 項目見られたが、そのうち実に 90%に相当する語幹が促音語尾をとるものであった。対して、撥音語尾・リ語尾と共起する語幹はほぼ 5 割程度に留まる。

この事実に加え、那須 (2007) は促音語尾だけを排他的に伴う語幹が極端に多いことも指摘している。(3)ならびに(5)に挙げたように、オノマトペの語幹の中には特定の語尾しか伴わない形式がある。KTS においても、促音語尾・撥音語尾・リ語尾のいずれかのみを排他的に伴う語幹が見られた。その内訳は次の通りである。

(8)

促音語尾のみをとる	59/ 230 (25.7%)
撥音語尾のみをとる	18/ 230 (7.8%)
リ語尾のみをとる	4/ 230 (1.7%)

全 230 項目の二音節語幹のうち、特定の語尾だけを伴う語幹 (専用語幹) は 81 項

目見られる (59 + 18 + 4 = 81)。そのうち 59 項目が促音語尾だけを排他的に伴う語幹であり、専用語幹に占める比率は 72.8%である (59/81*100)。また、語幹の全体数 (230 項目) における促音専用語幹の比率は上表にあるとおり 25.7%である。すなわち、KTS 所載の語幹のうち実に 4 分の 1 が、促音語尾のみと排他的に共起する語幹であることになる。

3.2 語形評価テスト

ところで、KTS を対象とした上の語彙調査では、促音形が全く掲出されていない語幹も見られた。表(7)に見たとおり、促音語尾を伴う語幹は 9 割に達するが、残り 1 割に相当する次の語幹に関しては KTS において促音形が掲出されていなかった。

(9) 促音形が掲出されていない語幹

カク、キョト、ギロ、グビ、コク、コチ、コテ、ジャボ、ジャラ、ショボ、ステ、スト、ズド、チャボ、チャリ、チョコキ、チリ、ドス、ドブ、ドボ、ハラ、プリ、ユル

しかし、はたしてこれが実態と整合する記述であるかどうかは疑問である。実際、KTS において促音語尾を伴わないとされる(9)の語幹のうち、たとえば「ギロ、グビ」に関しては、「ギロ^ッ (と睨む)」や「グビ^ッ (と飲む)」といった促音形は決して不自然な形ではない。

辞典の記述に基づく調査結果(7)(8)は、促音語尾の特徴的な性格を捉える上で相応に説得力のある数値を示している。しかし一方では、辞典の記述が必ずしも言語の実像を忠実に反映しているとは限らないのも事実である。(9)の語幹についても、母語話者が辞典の記述と異なる判断を示す可能性は十分に考えられる。そこで本研究では、KTS において吸収しきれなかった言語事実を捉えるべく、成人母語話者 45 名を対象にアンケート形式の語形評価テストを行い、促音形が実際にどの程度容認されるか調べた。

このテストでは、(9)の語幹を含むオノマトペを文脈の中に組み入れ、促音形・撥音形・リ語尾形を並列に示した上で、違和感のある語形に印をつけるよう要求した。語形の示し方の一例を挙げる。

(10) 提示例

バナナの皮に気づかずに踏んだ私は、みごとに $\left\{ \begin{array}{l} \square \text{ステット} \\ \square \text{ステリと} \\ \square \text{ステンと} \end{array} \right\}$ 転んでしまった。

被験者は「ステット、ステリと、ステンと」のうち各自の判断で違和感のある語形に印をつける。印をつける語形は複数あっても構わない。あるいは、どの語形も容認できるのであれば印を全くつけなくてもよい。あくまで個々人の判断に基づいて違和感のある語形を指摘してもらうようにした。なお、被験者に示した文脈は本稿末尾に〔資料〕として示す。

3.3 結果の検討

調査を実施した後、それぞれの語幹について促音形に「違和感あり」の印がつけられていない数を計上した。その結果を次の表(11)に示す。表中の「人数」は促音形に「違和感なし」と回答した被験者の数、すなわちアンケート用紙上で促音形に印を入れなかった被験者の数である。

(11) 促音形の容認性に関する評価結果

促音形	人数	割合(%)
カクッ	37	82.2
キョトッ	20	44.4 *
ギロッ	45	100.0
グビッ	45	100.0
コクッ	39	86.7
コチッ	24	53.3 *
コテッ	39	86.7
ジャボッ	38	84.4
ジャラッ	44	97.8
ショボッ	10	22.2 *
ステッ	34	75.6

ストツ	28	62.2	*	
ズドツ	26	57.8	*	
チャボツ	38	84.4		
チャリツ	34	75.6		
チヨキツ	42	93.3		
チリツ	8	17.8	*	
ドスツ	41	91.1		
ドブツ	30	66.7	*	
ドボツ	30	66.7	*	
ハラツ	37	82.2		
プリツ	42	93.3		
ユルツ	12	26.7	*	平均容認率：71.8% (743 / 1035)

1035 の回答総数のうち 743 の回答が促音形を容認するものであった。促音形の容認率は平均で 7 割を越えており (71.8%)、中には「ギロツ、グビツ」のように全ての話者が容認判断を示した語も見られる。この結果は、先に示した(7)(8)の統計と並んで、促音語尾を伴う形式が一般に現れやすく容認されやすい語形であることを物語っている。

ただし、語によっては促音形の容認率がそれほど高くないものも見られた。表(11)で*印をつけた 9 語では促音形の容認率が平均の 71.8%を下回っており、特に「チリツ」に至っては 17.8%とかなり容認率が低い。だが、この点については以下に述べるような考慮すべき事情がある。

第一に、促音形の容認率が平均を下回る 9 つの語幹では、促音以外の語尾を伴った形が一般に定着している点が特筆される。たとえば「キョト、ショボ」では「キョトン、ショボン」といった撥音形が既にあり、こうした定着語形が促音形よりもふさわしい形として認識された結果、促音形の容認率が相対的に低下した可能性がある。この可能性は統計的にも支持される。次ページの表(12)は、語形評価テストで得られた撥音形・リ語尾形・促音形の容認率をまとめて示したものである。(*印は促音形の容認率が平均値を下回った語幹)

(12) 容認率の比較（単位＝％）

語幹	撥音	り語尾	促音	
カク	84.4	13.3	82.2	
キョト	100.0	40.0	44.4	*
ギロ	11.1	95.6	100.0	
グビ	2.2	73.3	100.0	
コク	80.0	91.1	86.7	
コチ	73.3	33.3	33.3	*
コテ	88.9	28.9	86.7	
ジャボ	95.6	17.8	84.4	
ジャラ	37.8	75.6	97.8	
ショボ	93.3	26.7	22.2	*
ステ	97.8	4.4	75.6	
スト	100.0	20.0	62.2	*
ズド	100.0	11.1	57.8	*
チャボ	100.0	37.8	84.4	
チャリ	100.0	11.1	75.6	
チョキ	95.6	40.0	93.3	
チリ	97.8	57.8	77.8	*
ドス	95.6	48.9	91.1	
ドブ	97.8	46.7	66.7	*
ドボ	97.8	37.8	66.7	*
ハラ	4.4	100.0	82.2	
プリ	84.4	33.3	93.3	
ユル	0.0	100.0	26.7	*
平均	75.6	45.4	71.8	

*印をつけた語幹では、唯一「コチ」を除いて、撥音形ないしはり語尾形の容認率が9割を超える高い値を示している。表中の網掛け部分の数値を対比してみると、促音形の容認率が平均を下回る語幹では、逆に撥音形・り語尾形の容認率が高いことが分かる。喩えて述べるならば、これらの語幹では撥音語尾やり語尾がいわば「固定客」として定着しているため、「一見の客」である促音語尾が共起する余

地が元来少ないと言える。

第二に、促音形の容認率が比較的低い語幹には、擬音語として働きやすいものが目立つ。「コチ、ズド、チリ、ドブ、ドボ」がそれである。これらの語幹に関して注目されるのは、擬音形の容認率が比較的高い割合を示していることである。Hamano (1998) は、擬音に「運動の方向ないしは音響の質が終わりに向かうにつれ変化すること」を表象する機能があると述べているが^{*1}、擬音に音響や共鳴を表象する特段の機能が備わっていることは、従来しばしば指摘されているところである。先に本稿冒頭において、音象徴論的観点から語尾の特性を捉える試みに対して懐疑的な立場を示したが、こと擬音に関しては、その象徴性が一律に否定できるわけではないと考える。「コチ、ズド、チリ、ドブ、ドボ」などの擬音語用法を持つ語幹では、音響の表象と関わる擬音との共起はむしろ自然であり、それゆえ促音形の容認率が相対的に低い値に留まった可能性がある。

第三に、被験者に提示した文脈が評価に影響を与えたと考えられる事例がある。「チリ」がそれである。今回の語形評価テストでは、この語幹に関して「…夕方になると豆腐屋が___と自転車のベルを鳴らしながら…」という文脈を提示した。「ベルを鳴らす」という表現から窺えるとおり、この文脈では擬音語読みしか成立しない^{*2}。そのため「チリン」という擬音形の支持率が極めて高く、逆に促音形の支持率は低迷している。この事例はテストの手法をめぐる反省点でありながらも、一方では擬音語尾が音響の表象という特段の機能を備えた、意味的に有標な語尾であることを示す事例でもある。(この点については4.2節で触れる。)

3.4 考察

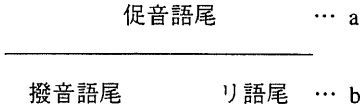
オノマトベにおける三種類の語尾は、従来暗黙のうちに、互いに対等な鼎立関係にあると想定されてきた。つまり {促音語尾} 対 {擬音語尾} 対 {リ語尾} という関係である。しかしながら、語尾の共起特性に関する表(12)の統計的数値は、この

*1 “/N/ indicates that the direction of the motion or the quality of the sound changes toward the end.” (Hamano 1998: 67)

*2 今回の語形評価テストでは擬音語と擬態語を特に区別しなかったが、「チリ」については「髪の毛が [] と焦げた」のような擬態語読みの可能性を含む文脈を示すべきであったろう。

暗黙の鼎立関係を決して支持するものではない。促音語尾の突出した共起範囲の広さに鑑みると、オノマトペ語尾のうち少なくとも促音語尾だけは、他の語尾とは異なる独立のカテゴリーをなしていると考えられる。すなわち、オノマトペの語尾の体系は、(13)に示すような「1項：2項」からなる関係をなしている。

(13) 語尾の関係



この二つのカテゴリーを分かつ特性の違いとして考えられるのは、象徴性の関与の有無である。象徴語であるオノマトペにおいて、促音語尾が多様な語幹と比較的自由に共起できるということは、促音が語幹の象徴的意味に囚われない性格を備えていることを意味している。つまり、促音語尾(13a)はその他の語尾群(13b)に比べて意味的に透明性の高い語尾であり、それゆえ特定の象徴的意味が共起阻害要因として働きにくく、意味の異なる多様な語幹と共起しやすいものと考えられる。促音の意味的透明性は、先に2節で論じたゼロ形との交替現象(6)の事実からも支持される。ゼロ形(すなわち語幹)が何らかのオノマトペ語尾を必要とする時、最も自然に共起できる候補は促音語尾において他にないからである。

言うなれば、促音語尾は他に特段の意味的な条件や要求が伴わない限り選ばれるデフォルトの語尾として振る舞っている。この点で(13)の関係は、意味の側面から見た語尾の有標性を表現していると言ってよい。撥音語尾やり語尾が何らかの象徴性を持つ有標な語尾であるのに対して、促音語尾だけは意味的に透明な無標語尾だと考えられる。

4. 仲間分けの関係

4.1 韻律調整機能

ここでひとつ疑問に思われるのは、促音が無標語尾であるにせよ、なぜオノマトペでは語尾の添加が逐一強制されるのかということである。語形成上の一つの選択として、語幹が語尾を一切伴わないままゼロ形として表出するという選択もあり得

るわけだが*3，Waida (1984) が指摘するように，なぜかオノマトペでは語尾のつかない形は適格でない。しかも，促音語尾は語末促音という極めて有標性の高い音韻構造を作り出す。そうした有標構造を作っても語尾添加が強制されるのは一体なぜだろうか。

この疑問に対して那須 (2007) は，オノマトペの韻律要求の一つに語末主要部型のプロソディの形成があるとし，促音はこの要求を満たすべく生じる韻律調整要素であると論じている。(14)に示すように，オノマトペの多くの形態では語末に韻律主要部 (アクセントのあるフット) が形成される。(語末主要部制約)

(14) 語末主要部 (「'」はアクセント核，()はフット，#は語末)

a. 接辞形

ガタ' ッ ga(ta' Q)#

ガタ' ン ga(ta' N)#

ガタ' リ ga(ta' ri) #

b. 接辞つき反復形

ガタガタ' ッ gataga(ta' Q)#

ガタガタ' ン gataga(ta' N)#

c. 部分反復形

ガタタ' ッ gata(ta' Q)#

ガタタ' ン gata(ta' N)#

ドド' ッ do(do' Q)#

ドド' ン do(do' N)#

(14a)「ガタ' ッ」に見るように，促音語尾はこうした語末主要部型のプロソディを作る上で一役買っている。また(14)を見ると，強弱格 (trochee) を崩さない範囲において，アクセント核が可能な限り語末音節に形成されていることが分かる (語

*3 語幹が語尾を伴わないまま表出すること (ゼロ派生) は決して特異な現象ではない。たとえば母音語幹動詞の活用 (未然形・連用形) や英語の無変化動詞 (*cut, hit* など) や単複同形名詞 (*sheep, fish* など) に見るように，ゼロ派生は語形成法の一つである。

末アクセント制約)^{*4}。この点に関しても促音形「ガタ' ッ」は望ましい構造を持っている。

語末に韻律主要部を求めるという点では、実は、「ガ' タ」のようなゼロ形もこの要求に従った構造ではある。しかしながら、アクセントが語末音節ではなく次末音節に置かれる点で十分な形ではない。一方、促音が添加された「ガタ' ッ」では、語末主要部構造が作られると同時に語末音節へのアクセント付与も実現されている。

(15) 韻律構造の比較

語形	韻律構造	アクセント
a. ガ' タ (ゼロ形)	F' #	σ' σ#
b. ガタ' ッ (促音形)	σ F' #	σ σ' #

すなわちゼロ形に比べて促音形は、語末主要部制約および語末アクセント制約の双方を同時に満たす点で、より望ましい韻律構造を備えている。語末に添加される促音語尾は、最適な韻律構造を作る上で欠くべからざる役割を担っているのである。

こうした性格が見えてくると、促音を他の語尾と一括りにして《語尾》と呼ぶことにはいささか抵抗が生じてくる^{*5}。促音は、従来主張されてきたような「瞬時性・スピード感・急な終わり方」(田守・スコウラップ 1999)といった象徴的意味をもたらすために添加されるのではなく、その第一義的な機能とは、語末主要部型のプロソディを作り出すための韻律調整の役割を果たすことである。そこで再度(13)の関係に立ち戻って考えるならば、オノマトペの語尾要素の性格ならびに関係を、あらためて次のように示すことができる。

*4 唯一「ガタ' リ」のみが語末音節に核を持たない形式だが、これは強弱格 (ta' ri) を維持する要求が強く働くためである。語末音節へのアクセント付与という点では「*ガタリ」のようなパターンのほうが適合性が高いのだが、このパターンは *ga (tari')# という弱強格 (iamb) を作ってしまうため、実際の出力には現れない。つまり、強弱格制約は語末アクセント制約よりも強い要求として働いている (那須 2007)。

*5 ただし、前後の議論での用語の統一性を図るために、本稿では引き続き便宜的に「促音語尾」という表現をとる。

(16) 語尾の関係

	韻律調整機能
促音語尾	+
撥音語尾 り語尾	-

二つのカテゴリー，すなわち「促音語尾」と「撥音語尾，り語尾」とを分かつ特性の違いとは，当該のカテゴリーが韻律調整要素としての機能を担うか否かという一点に尽きる。促音語尾が韻律調整機能を発揮するのに対し，撥音語尾・り語尾にはそうした機能が認められない。

4.2 擬音表象機能

これまでの議論を通じて，促音に関しては韻律調整機能を担う語尾として，他の語尾とは一線を画する性格があることを明らかにしてきた。では，残り二つの語尾についてはどうだろうか。ここでまず想起したいのは，3.3 節で触れた撥音語尾に関する次の議論である。

撥音語尾の特徴の一つとして，擬音語とのつながりが極めて密接であることが挙げられる。3.3 節では，語形評価テストにおいて促音形の容認率が有意に低い語幹を取り上げ，そのような語幹では逆に撥音形の容認率が向上することおよび，それらが擬音語として働きやすいことを見た。実際，撥音形の容認率が 9 割を越える高率を示した語幹には，擬音語として働くものが目立って多い。

(17) 擬音語 (())は撥音形の容認率)

ジャボン (95.6%)，ズドン (100.0%)，チャボン (100.0%)，チャリン (100.0%)，
 チョキン (95.6%)，チリン (97.8%)，ドスン (95.6%)，ドブン (97.8%)，
 ドボン (97.8%)

興味深いのは，撥音語尾を好むこれらの語幹に関しては，促音語尾だけでなくり語尾も嫌われる傾向が見られることである。当該の語幹について撥音形とり語尾形の容認率を比較して示す。

(18) 容認率の比較（単位＝％）

語幹	撥音	リ語尾
ジャボ	95.6	17.8
ズド	100.0	11.1
チャボ	100.0	37.8
チャリ	100.0	11.1
チョキ	95.6	40.0
チリ	97.8	57.8
ドス	95.6	48.9
ドブ	97.8	46.7
ドボ	97.8	37.8

この数値の比較から窺えるように、音響の表象と縁の深い擬音語に関してはまさに撥音語尾の独壇場である。撥音語尾のみに特有の性質があるとするならば、それは音響の象徴機能を持つことにほかならない。

先に(16)において、オノマトペの語尾のうち促音語尾だけが韻律調整要素として特立されることを見たが、撥音語尾に関しても、音響の表象機能の有無に視点を置くことで同様の位置づけができる。すなわち、(19)に示すような「1項：2項」からなる仲間分けが可能である。

(19) 語尾の関係

	擬音表象機能
撥音語尾	+
促音語尾 リ語尾	-

擬音表象機能を軸とする視点から見ると、今度は「撥音語尾」対「促音語尾、リ語尾」といった類別が施せる。もちろん、撥音の表象機能の幅は音響の表象だけに留まるものではなく、Hamano (1986, 1998) が指摘するように、物体の弾性や動作の持続性を表すことも撥音独特の重要な特性である (Hamano 1998: 68-72)。この点で(19)の分類はあくまで暫定的なものに過ぎないかもしれないが、撥音語尾に擬音語との有意な親和性が見られること自体は、依然特筆に値する。

4.3 文章語的性格

残るリ語尾についてはどうであろうか。リ語尾に関する従来の指摘のうち考慮すべきと思われるのは、そこに「文語的」な表現効果があるとの指摘である(田守1983, 田守・スコウラップ1999)。たしかに、リ語尾形は書き言葉にはよく用いられるが、話し言葉ではそれほど用いられない傾向が見られる^{*6}。「文語的」という観察が厳密なところ適切であるかどうかは検討を要するが^{*7}、語形の定着度や語彙性の高さに関して、リ語尾に特有の性質が垣間見られるのは確かである。とりわけ促音語尾と比較した場合、リ語尾には次のような無視できない特徴が見出される。

まず、リ語尾を伴うオノマトベ形式には語彙的に定着しきった定型的なパターンが多い。その最も典型的な語形が「ビククリ、ガッチリ、パツタリ」といった強調形である。笈(1993)によれば、この形式のオノマトベには語彙化が進んでいるものが多いという。たとえば「ビククリ」「ガッチリ」などは、「ビククリする」「ガッチリしている」のように直接動詞化できることから、極めて語彙性が高いと考えられる。また、これと同様の形式には「しっかり、ゆっくり、あっさり、こっそり」のように、オノマトベであるのか一般副詞であるのか判じがたい語が多い。その一方で、促音語尾はこの語形成には一切参入しない。つまり次のような派生形を作れない。

(20) *ビクツ (<ビクツ), *パツタツ (<パタツ), *ガッチツ (<ガチツ)

上の振る舞いの違いは、リ語尾と促音語尾のはっきりとした性質の違いを示唆する点で興味深い。リ語尾が定型的な語形に含まれるのに対して、促音語尾は定型的な語形に含まれることがない。

*6 この点については今後厳密な検証を行いたいだが、小田紀子氏(私信)によれば、小説の地の文と会話文とではリ語尾形の現れる頻度に明らかな違いが見られるという。リ語尾形は、地の文に多い一方で会話部分にはほとんど見られないという。このことは、リ語尾の文章語性を支持する証拠につながると考えられる。

*7 リ語尾形は現代語でも使われる形であるので、言うなれば「文章語的」が適当であろう。

また、これとは全く逆に、リ語尾は自由な派生をもたらす語形成過程には全く参入できない。直截に換言すると、新造語的なオノマトベにはリ語尾が含まれない。たとえば、オノマトベには反復を任意回数累加するパターン(多重反復形)や、語幹の一部だけを繰り返すパターン(部分反復形)があるが、これらのパターンには促音語尾や撥音語尾を含む形はあってもリ語尾を含む形は見られない。

(21) 多重反復

- a. バタバタッ, バタバタバタッ, バタバタバタバタッ (促音形)
- b. バタバタン, バタバタバタン, バタバタバタバタン (撥音形)
- c. *バタバタリ, *バタバタバタリ, *バタバタバタバタリ (リ語尾形)

(22) 部分反復

- a. バタタッ, バタタタッ, バタタタタッ (促音形)
- b. バタタン, バタタタン, バタタタタン (撥音形)
- c. *バタタリ, *バタタタリ, *バタタタタリ (リ語尾形)

多重反復形は、繰り返しを話者の任意の回数だけ許す点で自由度の高い語形成であり、部分反復形は漫画のレットル表現などに際立って多く見られる形式である(那須 2004)。いずれも新造性が高く、逆に定型性・語彙性に乏しい。こうした臨時的かつ新造語的な形式にリ語尾が含まれないということは、リ語尾が文章語表現と親和性の高い語尾であることを支持する傍証となろう。

リ語尾に特徴的な上述の振る舞いを踏まえると、リ語尾に関しても「仲間分け」の関係が主張できる。仲間分けの関係におけるリ語尾の位置づけは、(21)(22)の非対称性に端的に現れている。すなわち、リ語尾は他の語尾に比べて定型性の高い語形に含まれやすく、逆に臨時的・新造的な表現には現れにくい。ある種の決まりきった語形を維持する振る舞いが顕著であることから、リ語尾には文章語的な性格がより強く垣間見られる。

(23) 語尾の関係

	文章語的性格
リ語尾	+
促音語尾	-
撥音語尾	-

ただ、この仲間分けの関係を主張する上で、本稿の範囲では語形成上の振る舞いに見られる非対称性(21)(22)という間接的な証拠立てに依拠せざるを得ない。このため「文章語的性格」という捉え方がはたして十分なものであるかどうかはさらに検討の余地がある。しかし、少なくともリ語尾が一定の型にはまった(語彙化された)語形しか作り出せないことは、他の語尾との顕著な性質の違いとして指摘に値する。

4.4 促音語尾とリ語尾

リ語尾の性格をめぐってとりわけ興味深いのは、それが促音語尾と全く対照的な振る舞いを見せることである。(20)および(21)(22)に挙げたように、促音語尾はリ語尾の現れる語形成環境には現れず(=20)、逆にリ語尾は促音語尾の現れる語形成環境には現れない(=21, 22)。両者はあたかも相補分布に似た振る舞いを見せている。また、促音語尾が語末促音という異例の構造を作り出す一方で、CV 拍であるリ語尾がついた形は、日本語の音節構造制約に何ら抵触することがない。語形成においても音韻構造においても、促音語尾がより新造的性格の強い形式や構造を作り出すのに対し、リ語尾は日本語本来の構造を常に維持する形式だけを作る点で、より保守的な語尾だと言える。

ところで、リ語尾と促音語尾との関係については、両者の間に直列的・通時的な音韻派生関係があるとの主張が田守(1983)においてなされている。曰く、「バタッ、ポキッ」などの促音形は「バタリ、ポキリ」といったリ語尾形から母音消去・完全同化が起こることによって派生されるとの主張である。田守(1983)の分析を引用して示す。

(24) 田守(1983: 71)

基底形	/pokiri + to/
母音消去	/pokirø + to/
完全同化	/pokit + to/
表層形	pokitto (ポキッと)

田守はこれを歴史上生じた動詞の促音便と類似の変化であるとし、促音形が歴史的にリ語尾形から派生された形だとしている。しかしながら、この分析はあまりに荒唐無稽に過ぎる。

第一に、「基底形」としてのリ語尾形がないオノマトペをどう評価するかという

問題がある。たとえば漫画作品などに現れる語末促音含みの新造オノマトベには、これに対応するリ語尾形がないものが多い。仮に促音形がリ語尾形をベースとして派生されるのだとすると、こうした通時的派生を想定できない新造オノマトベの由来が説明できない。

第二に、もし(24)のような音韻環境（…りと…）が整えば促音形への派生が起こるのだとすると、「ガッチリと（掴む）」「グンニヤリと（曲がる）」のような形式でも促音形が派生してよいはずである。しかるに「*ガッチと」「*グンニヤと」といった派生語は見受けられない。

第三に、音便はオノマトベとは無縁の、それ独自の体系的・機能的要求から発した通時現象であり、その動因は単なる音韻条件のみによって説明されるべきものではない（こまつ 1975）。この点でオノマトベと促音便を同一視するのは、見かけ上の類似に囚われた稚拙な類推に過ぎず、まして促音便に準えて(24)を通時変化の一種と結論するのは、あまりに粗雑な議論と言わざるを得ない。

たしかに、現代オノマトベのうち特に話し言葉で用いられる臨時的・新造的な形式では、リ語尾形に比べ促音形が数の上で増しているのは実勢であろう。しかしながら、それを単にリ語尾形からの通時的な音形変化の結果と考えるのは速断に過ぎる。リ語尾と促音語尾の関係は時間軸上の直列的なつながりの下で説明されるべきものではない。むしろ、(20-22)の振る舞いの違いは、リ語尾にはリ語尾のカバーする特有の領域ないしは特性があり、一方で促音語尾にはそれとは別の特性が備わっていることを示唆している。すなわち、現代語のオノマトベの用法においては、リ語尾形と促音形が書き言葉文脈と話し言葉文脈とで平行的な棲み分けをなしている可能性が考えられる。

4.5 促音形とゼロ形

ここでリ語尾と促音語尾の通時的分布について、先行研究での指摘を振り返っておきたい。オノマトベ語形の史的変遷に関しては、リ語尾形が既に中古日本語からその例が見られる一方で、促音形は比較的新しい時期（近代以降）に入って頻繁に観察されるようになった語形であることが、鈴木（1973, 1984）および山口（2002）において指摘されている。リ語尾のほうが歴史が古く、対して促音語尾は歴史が浅いことから、この指摘を踏まえると、リ語尾と促音語尾の間には何らかの時間的なつながりが認められそうである。

しかしながら、このことは直ちに両者の間に直列的・通時的派生関係を認める根

拠にはつながらない。たとえり語尾形と促音形との間に発生時期の差が事実として認められようとも、それはり語尾が衰退した後にこれを補完すべく促音語尾が発生したことを直ちに意味するとは限らないからである。この点をめぐって若干議論を附しておきたい。

鈴木 (1973: 140) によれば、り語尾形・ゼロ形・促音形の通時的変遷は次のようである。

(25) 形態の歴史的分布状態*8

	り	∅	Q
中古	◦	◦	—
中世(前)	○	○	—
中世(後)	◎	◎	—
近世	◎	◦	—
現代	●	—	●◎

「り」＝り語尾形 (例：ヒラリ)

「∅」＝ゼロ形 (例：シト)

「Q」＝促音形 (例：ピタッ)

「◦」 1～20 語

「○」 20 語前後

「◎」 30 語前後

「◎」 50 語前後

「●」 100 語前後

注目すべき点が二つある。一点目はり語尾形の分布である。り語尾形は現代において衰退するどころかむしろ用例数の上では近世以前よりも増えている。この点は、り語尾形と促音形との間に通時的な衰退／増加のつながりを認める主張への反証にもなり得る。二点目は促音形と他の形との分布上の関係である。促音形はり語尾形よりもむしろ、ゼロ形との間に分布上の相補性が認められる。中世に増加したゼロ形が近世を経て現代で見られなくなる一方で、これに取って代わるかのように、現代では促音形が増えている。

*8 鈴木 (1973) では、り語尾形は「語末り」・ゼロ形は「語基二音節原型」・促音形は「語末促音」との名称で分類されている。ここでは本稿の用語に整合させるべく呼称を変えてある。

むろん、この統計を直ちに信頼するわけにはいかない。とりわけ近世以前と現代との間には、そもそも言語資料の数において大きな隔たりがあることを踏まえる必要がある。しかし、それを勘案してもなお、上述の第二点目は一考に値する。ゼロ形が現代語において極めて僅少であるのは確かであり、その傍ら、促音形が現代語において目立つことは、話し言葉や漫画作品などの新造オノマトベの用例からも窺えるからである（cf. 那須 2004）。

上の統計から可能な限りの推測を施すとすれば、けだし、促音形は語尾形よりもむしろゼロ形との間に深い関わりを有しているのではないか。このことは、2 節の(6)の事実をめぐる議論からもその根拠を探ることができる。促音形が近代に至って何の脈絡もなく突然発生したとは考えにくく、文献に上らない環境では、すなわち話し言葉の世界では、近世以前にも促音形は用いられていたのではないかと推察される^{*9}。

この推察を確かな根拠を以って裏づけるには、現代語も含めたオノマトベの通時的実態を精査する必要がある。その際、言語資料の性格に留意する必要がある。そもそもオノマトベは音象徴語である以上、口頭に上ってこそその機能をより十分に発揮する語彙である。このため、こと現代語におけるオノマトベの実態を観察する際には、書き言葉資料よりもむしろ話し言葉資料への注意が欠かせない^{*10}。ただ、これらの点については本稿の範囲を超える問題でもあるため、今後の考究課題としておきたい。

5. まとめと課題

本稿では、オノマトベに現れる語尾の分布の実態ならびに語尾同士の関係について考察してきた。三種類の語尾がその象徴的意味に従って対等かつ相補的な鼎立関係をなすとする従来の暗黙の見解に対して疑義を呈示し、語幹との共起様態から窺える事実に基づいて、三者の間に「1項：2項」からなる仲間分けの関係が見出さ

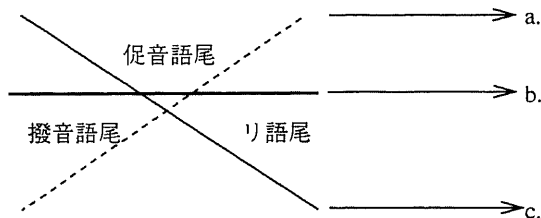
*9 鈴木（1984）では、近世の浄瑠璃の作品に促音形の例があることが指摘されている。

*10 表(25)において、リ語尾形が現代語においてむしろ増加しているとの実態が見られたことには、書き言葉資料が長らく主たる観察対象とされてきたことにも一因があるのではないかと考えられる。

れることを論じた。

オノマトベの語尾は、三つの軸それぞれに基づいて次のような仲間分けの関係をなしている。

(26) 語尾の仲間分け



破線で示した(26a)は文章語性の軸であり、書き言葉の性格の強いり語尾と、それ以外の語尾とを隔てる特性である。太い実線で示した(26b)は、韻律調整機能を担う促音語尾と、そうした機能を担わない他二者とを隔てる軸である。さらに、細い実線で示した(26c)は擬音象徴機能の軸であり、擬音象徴性の色濃い撥音語尾とその他の語尾とを隔てている。

オノマトベの三種類の語尾は、決して単純な鼎立的関係をなしているのではない。本稿の3節で主に論じた分布特性や共起様態に関する統計的事実は、三種類の語尾の間に不均整な特性の違いがあることを示している。オノマトベ語尾の範疇化は決して一様ではなく、基準となる軸の違いにより、三者の間にはそれぞれの特性を反映した範疇化（相互の関係）を見出すことができる。

付記

本稿は、文部科学省科学研究費補助金の助成を受けた研究課題（若手(B), 19720091）ならびに、財団法人博報児童教育振興会による第二回「ことばと文化・教育」研究助成を受けた研究課題（06-A-0007）に係る研究成果の一部をまとめたものである。

参考文献

笈 壽雄（1993）「一般語彙となったオノマトベ」『言語』22-6: 38-45, 東京: 大修館書店。

金田一春彦（1978）「擬音語・擬態語概説」浅野鶴子（編）『擬音語・擬態語辞典』東

- 京: 角川書店, pp.3-25.
- こまつひでお (1975) 「音便機能考」『国語学』101: 1-16.
- 鈴木雅子 (1973) 「擬声語・擬態語一覧」鈴木一彦・林巨樹 (編)『品詞論の周辺 (品詞別日本文法講座 10)』東京: 明治書院, pp.140-184.
- 鈴木雅子 (1984) 「擬声語・擬音語・擬態語」鈴木一彦・林巨樹 (編)『研究資料日本文法 4』東京: 明治書院, pp.159-201.
- 田守育啓 (1983) 「オノマトペー音韻形態と語彙性ー」『人文論集』19-2: 63-85, 神戸商科大学経済研究所.
- 田守育啓・ローレンス=スコウラップ (1999) 『オノマトペー形態と意味ー』東京: くろしお出版.
- 那須昭夫 (1995) 「オノマトペの形態に要求される韻律条件」『音声学会会報』209: 9-20.
- 那須昭夫 (2000) 「オノマトペにおける促音の韻律調整機能」第 8 回日本機能言語学会秋季大会ワークショップ「音韻と機能のインターフェイス」研究発表, 武庫川女子大学.
- 那須昭夫 (2004) 「新造オノマトペの音韻構造と分節の無標性」『日本語科学』16: 69-91.
- 那須昭夫 (2007) 「オノマトペの語末促音」『音声研究』11-1: 47-57.
- 山口仲美 (2002) 『犬は「びよ」と鳴いていたー日本語は擬音語・擬態語が面白いー』東京: 光文社.
- Hamano, Shoko (1986) *The Sound-Symbolic System of Japanese*. Ph.D. dissertation, University of Florida.
- Hamano, Shoko (1998) *The Sound-Symbolic System of Japanese*. Stanford, Tokyo: CSLI and Kurosio.
- Kakehi, Hisao, Ikuhiro Tamori, and Lawrence Schourup (1996) *Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Waida, Toshiko (1984) English and Japanese onomatopoeic structures. 『女子大文学 (外国文学篇)』36: 55-79, 大阪女子大学文学会.

〔資料〕

本研究で実施した語形評価テストに用いた文脈を示す。

- ・「カク」 階段を駆け上がる途中、ハイヒールのかかとが____と取れてしまった。
- ・「キョト」 合格の知らせに母は一瞬____とした顔を見せたが、すぐに喜びの表情に変わった。
- ・「ギロ」 年老いた和尚は目を開くと____と男の顔を見返した。
- ・「グビ」 酒を杯に受けると、そのまま____と飲み干した。
- ・「コク」 つい居眠りしてしまい、時折頭が____と下がっては目を覚ました。
- ・「コチ」 テーブルにぶつかって、そのはずみでフォークが____と床に落ちた。
- ・「コテ」 ドミノは軽く風が吹いただけでも____と倒れてしまう。
- ・「ジャボ」 魚は警戒しているので、エサを____と投げ込んではいけない。
- ・「ジャラ」 父はポケットから小銭を____と取り出して、幼い義彦の手に渡した。
- ・「ショボ」 叱られた子供が部屋の隅で____と小さくなって正座している。
- ・「ステ」 バナナの皮に気づかずに踏んだ私は、みごとに____と転んでしまった。
- ・「スト」 歩き始めた娘は、歩こうとするとすぐに____と尻餅をついてしまう。
- ・「ズド」 茂みに隠れる獲物をめがけて____と一発ぶっ放したが、見事に外れた。
- ・「チャボ」 辺りで聞こえるのは、ときどき湖に木の実が____と落ちる音くらいだ。
- ・「チャリ」 ポケットに手を入れると____と小銭が数枚手に触れた。
- ・「チョキ」 悪戯好きの孫が、猫のヒゲを____と切ってしまった。
- ・「チリ」 昔はよく、夕方になると豆腐屋が____と自転車のベルを鳴らしながら豆腐を売りに来たものだ。
- ・「ドス」 転がりながら崖を落ちて行き、その先で____と何かに当たって止まった。
- ・「ドブ」 暗い夜道を歩いていたところ、____と泥濘にはまってしまった。
- ・「ドボ」 突然、結わえてあった碇が____と海に落ち、付近の水夫たちも波に呑まれてゆく。
- ・「ハラ」 英文の手紙に添えてあった証明書が一枚____と床に落ちた。
- ・「プリ」 ゆで卵の表面は____としていて、まるで子どものほっぺたのようだ。
- ・「ユル」 山田君は椅子から____と立ち上がって、悠然とあたりを見回した。

なす あきお／人文社会科学研究科講師

（2007年12月10日 受理）